

# ミテ Mi'Te

## ◆詩と批評◆第166号◆

2024年◆春◆季刊



四方田犬彦 Yomota Inuhiko

金野孝子 Kinno Takako

イナン・オネル Inan Oener

ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles

笠間直穂子 Kasama Naoko

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

新井高子 Aral Takako



### ・本・

〈詩集〉四方田犬彦『離火』港の人 (¥2640)

金野孝子『詩集 山吹』私家版、岩手開発産業株式会社印刷

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (¥2420)

新井高子『ベットと織機』未知谷 (¥2200)

〈翻訳〉ビレテール著、笠間直穂子訳『北京での出会い もうひとりのオーレリア』みすず書房 (¥3960)

イナン・オネル訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品

〈評論〉樋口良澄『唐十郎論 ――逆襲する言葉と身体』未知谷 (¥2200)

新井高子『唐十郎のせりふ ――二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房 (¥3080)

### ・お知らせ 1・

新刊！新井高子詩集『おしらかさま綺聞』幻戯書房 (¥2420)

担当編集者による「note」は、<https://note.com/genkishobou/n/nc0f2fbb096e3>

### ・ 2 ・

新刊！岡部杏子・福田桃子編著『鳥たちのフランス文学』幻戯書房 (¥3740)

笠間直穂子著「ハンボソガラスと血―マリーヌ・ンディアイ『魔女』における鳥」所収

詳細は、<https://www.genki-shobou.co.jp/books/978-4-86488-294-1>

### ・ 3 ・

樋口良澄と新井高子が、国際シンポジウム「13年後のカタストロフ文学」で発表します。

2024年3月29日・30日 於・イナルコ（フランス国立東洋言語文化大学）

<https://ifrae.cnrs.fr/activites/evenements-a-venir/la-litterature-de-la-catastrophe-13-ans-apres/>

### ・ 4 ・

『現代詩手帖』2024年4月号（思潮社）に、新井による詩と声をめぐる考察が掲載されます。

<http://www.shichosha.co.jp/gendaishitecho/>

### ・ 5 ・

デジタル版『日本近代文学大事典』の「唐十郎」の項目を新井が担当執筆しました。

ジャパンナレッジのサイトから読めます。<https://japanknowledge.com>

### ・ 6 ・

『ミテ』新号は、サイト「お知らせ」欄から、pdfでも読めます（半年限定）。

<http://www.mi-te-press.net/>

【後記】四方田犬彦さんと金野孝子さんに詩の寄稿をお願いしました。

編集：新井高子 / 発行所：ミテ・プレス / 発行日：2024年3月20日（水）

寄付を随時受け付けております。郵便局口座：10090-74894051 名称）ミテノカイ

E-mail: [mite@ace.ocn.ne.jp](mailto:mite@ace.ocn.ne.jp)

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

## 痕跡

四方田犬彦

「隠すとは痕跡を遺すこと  
ただし誰の目にも見えない痕跡。」

知床の短い春を歩いた。灌木の途切れ目に  
ルピナスの貧しい花々がいくつか

身を寄せながら咲いている。「王道楽土」を追放され  
もう一度宛がわれた地に挫折した人たちの跡だ。

キブツから曠野にむかって歩き出したときもそうだった。  
土に溶け崩れた白礫の隅に列をなす 小さなサボテンの芽。

微しるしはつねに見えない。

隠すという行為そのものが痕跡なのだ。

\*

無数の蛇を刻んだ宮殿の露台 燦燦とした陽光の下で  
王が最愛の王妃の手首に微かな癩斑を認める。

純白の皮膚に立ちのぼる凶事まがごとの兆きざし。

金貨の摩滅した神像にふと浮かび出る 混ざり物の鉛。

一度生じたものは二度と消えない。

ただ姿を変えて 地上から退くだけ。

ああ、金髪のエックベルト、

お前はどこに埋葬されているのか。

退くものなどない。すべては蟬の幼虫のように

召喚くわんの日が来るまで 湿った玄くろい土の下で待機している。

\*

あの三柱の神々 宇宙の始まりに顕現し  
たちどころに身を隠した精霊たちはどこへ行ったのか。

アメノミナカヌシ、

タカミムスヒ、

カミムスヒ、

地上が麻縄のごとく乱れ 疫病と汚穢が世界に蔓延するに先立ち  
静かに樹木の幹に浮かび出ただけで ものいわず消えて行った神々よ。

三柱の顕現は 存在という権能を知らせたいがために  
われら屠沽とがの下類の前に姿を現わしたのだ。

彼らは星澄める夜、カシユミアの翼に包まれて昇天したのか。

地上の喧噪を厭い 樹液の甘美に誘われるまま冥府に降り立ったのか。

身を隠した者はいつも窺っている。

現世の栄華が失効する瞬間を 陰鬱な辺土で待ち望み

この世のものとは思えない破壊と凋落が  
地上に王として再臨する日に備えている。

蟬よ、死に到達するためだけに地上に現れた熾セラフイム天使よ、  
濡れたセロファンの薄羽もて わが迷い事の数々を天界に伝えよかし。

## 納屋の旅立ち

金野孝子

バリバリッ バリッ

ああ 崩れで いぐどごだア

なんとオ 大きな音ば 立てで

百年以上も 稼だすと聞くこの納屋ア

粗壁の土ぼごりア 煙んたって

辺りいっぺア 巡り始めだア

いよいよ お別れだなア

ああ 煙ん中から 見えて来たア

昔 むがーすア 出はって来たア

稼えだ人アどの汗 掛声 笑ア顔

馬っことど ベエーゴの啼ぎ声

干し草だの藁の 匂えっこ

そすて おらの嫁この頃

味噌ゴガの陰っこで

泣アだ 涙もさア

煙だちー

おらア ここで見送っからア

お気をつけで お行きなはりアせ

あなたど暮らすた

昔の人アどア

遙が遠くに居りやっからア――

\*ベエーゴ：牛。味噌ゴガ：味噌樽。

\*（新井より）前号に続き、気仙舟の師匠、大船渡市の金野孝子さんにご寄稿いただいた。数年前に納屋を壊した時のことを書いたのだそうだ。煙に「昔」を重ねる眼差しには、浦島太郎の玉手箱を想起する人も多いかと思うが、古典文学の絵巻物等で多用される技法「すやり籠」は、じつは物語ることで、煙のように当座にやっつて来る、「昔」の動きや有様を絵画化する手法ではなかったろうか……。そのような夢想をしてみると、「昔が来る」という前回の内容とよく繋がる気がする。

## 大洋の怪物界

ジェフリー・アングルス

港を出ると水平線を越えて  
未知の動物界に向かう  
人間に見えなくても  
深い海溝の中で  
足が多い怪物が  
人肉に飢えた目で  
こちらを見つめて  
世界の果てを巡回する  
船体を巻き込む大海蛇  
船首を打ち壊す疣猪魚  
船員を迷わせる歌を歌う馬頭鯨

陸生動物は  
すべて海の中に  
相当する生物がいる  
と古代の哲学者が言う  
海は広く広がるからこそ  
活気づける要素を形成する  
空気の領域から生成原理を受け  
動物が数多く生まれると

しかし 海溝で群れる蛸を  
怖がらなくてもいいだろう  
やはりここでも 未知は  
既知の原則を受け取る  
幼少期の地図に従い  
孵化する母は暖かくて  
穏やかな亀裂の中で集まり  
保護を求めて卵を育てる  
遠い文明の嵐の下では  
どんなに暖かいだろう  
波の下の小さな隠れ家で  
海底に頭を休める  
地下火山の上の  
蛸の庭で

カリフォルニアから百二十キロほど離れた海底に、二〇一八年、「蛸の庭」と呼ばれる世界最大の蛸の繁殖所が発見され、二〇二三年に調査の結果が出た。オラウス・マグヌスの『海図(カルタ・マリナ)』を参考に、『プリニウス博物誌』とザ・ビートルズの「オクトパス・ガーデン」を引用した箇所がある。

## 玩具

新井高子

びイツぐらしたのですがですよ、わだしア。

庭掃ぎ男が、しよっ垂れだ麻衣の下人が、その胸ぐらバヒツ掴んで

叩ッ付けたがよ、

きんららきんらら、赤ア衣着物きた女御さまを

生まれてから、一度も土ヤア踏んだことのない人を

叩ぎのめしたのですよ、素手で。

ええ、芝居のながでありました。

振りや上がったのア、死んだあとの腕でした。

その女に片想いして、恋慕して、

鳴ったら姿を拝ませましよう、人づてに渡されたのア、鳴るはずもない楽器で。

打って、打って、毎日し日、オツ叩いでも、

玩具ほども響きませんで

布張りの鼓なんぞ

鳴るわけがないのだから、

端ッから嘘でした。

虫けらでした、その男は、

だもの、

それサなるよりほがねアがんしょう、庭の池サ入水して、するする首の長うなるまで

水飲んで、

空から降りんとするときにも、翅で水面を叩くでしよう、

鼓みだいに、

その虫は、ほうして恨んで、浮かび上がる靈魂が

来やるがよ、

汚れた素足で

芝に、

芝居に、

腕ふりや上げて

そうげなもの、

しつかと、ここサ立てるのが、役者のしごとでねえのすか。

その女が、その皮が、

ほれ、ほれ

ようやぐ鳴りますよ

舞台の上で、

いい尻だねえ

打ちますから、

笛っこ、合わしてくだしやんせえ

びイツぐらしやんせえ

目の前で

起ごることだよ

現実も、

芝居も、

\*能「練鼓」に靈感を得た。庭掃きは清掃夫、女御は高位の女官。

(Waterside 4)

## 詩人ジェマル・スレヤの三篇の詩

訳 イナン・オネル

詩人ジェマル・スレヤは一九三一年、トルコ東部エルズインジャン県生まれ。アンカラ大学政治学部金融経済学科を卒業し、財務省で監査官・造幣所所長を経て、文化省出版部編集委員会顧問を務めた。トルコの戦後詩ともいうべき「第二の新」一派に数えられる。詩誌「パピルス」を三度にわたって発行し、トルコ語の多方面の可能性に挑む姿勢により豊かな詩の流れを作った。一九九〇年にイスタンブールでこの世を去った。今号のために三篇の詩を訳す。

### 想い

赤い鳥である わたしの息  
茶髪の あなたの髪の毛の 空を飛ぶ  
わたしはあなたを抱く  
言い表しようがなく あなたの脚が伸びる

赤い馬になる わたしの息が  
顔の燃え方で分かる  
わたしたちは貧乏だ 夜は短い  
駆けるように愛し合うべき

### 恋愛

今あなたは去って行くだろう、行けばいい  
あなたの目も行くだろう、とどまるわけがない、行けばいい  
しかし、わたしはあなたの目がなくてはやっていけない、わかるだろう  
しかし、神のみぞ知る、今日わたしたちは元気に目が覚めた  
愛へ目が覚めた、最初は、愛だけへ  
一羽の鳥がわたしの指にとまって長々と鳴いていた  
一度愛し合いはじめたら、二度とやめなかった  
昨日の一日の貧困はなかった  
まるでまったく存在しなかった

しかしわたしは心臓がすぐそこで鼓動していた  
そこであなたの目の無造作な青く美しい言葉のイスタンブール  
そこでまたあなたの肉体が増えていた あなたの言葉や世界に触るほどに  
愛はそれほどに正すことで、それほどに治すことだった  
カラキヨイ橋に雨が降っていたときに  
放っておけば空が自ら二つに分かれるようだった



なぜならわたしたちが二人だったから

しかし一杯の水で充分だった あなたの髪の毛を濡らすのに  
一切れのパンと数個のオリーブで満腹になった  
あなたに一度キスをすれば 二度目が求められた  
二度キスをしようとすれば 三度目が惜しまれた  
あなたの顔が終わって からだが始まる場所に  
あなたの乳房があった あなたの乳房は英雄だった それから  
それから よかった 美しかった

わたしをキスして そして生んで わたしを

今

恥じらいである 種をなすのが  
金髪の子供の穂において

平野から

目を閉ざされたライラックの香り 平野から  
回す わたしたちの あの小さな太陽を

家から ベランダから あふれて  
やってきて わたしの声に住みつく

わたしの声の伸びやかなドクニンジン  
わたしの声のまばらのドクニンジン

そして鳥へ向かって

象牙・風の態度

山・太陽の骸骨

木造の彫像の間に

海の子 大きな子

血が見える 石が見える

すべての彫像の間に

悪夢 暖かく 初心者

——不眠のミルクの詰まったイチジク——  
巣箱に入らない

母はわたしがとても小さなころに亡くなった  
わたしをキスしてください そして生んでください わたしを

## 自動結晶

笠間 直穂子

新譜を楽しみにしている音楽家のひとりに、バビックスがいる。本名をダヴィッド・ババンといい、シンガー・ソングライターで、プロデューサーでもある。本連載第三回で紹介したL（ラファエル・ラナデル）のデビュー・アルバムは、彼のプロデュースによるものだ。

二〇〇〇年代初頭から音楽活動をはじめたバビックスは、三枚のアルバムを発表したのち、レコード会社の定めたスケジュールにしたがうのではなく自分の望むとおりに音楽をつくりたいと、二〇一四年に所属会社を去り、自身のレーベルを立ちあげた。以来、詩人たちの作品に曲をつけた『自動結晶#1』（二〇一四）、二〇一五年のパリ連続襲撃事件を契機に戦争と抵抗を思索した『上昇』（二〇一七）、コロナウイルス蔓延下で無料公開した（映像Ⅱアルバム）『うつろう季節』（二〇二〇）、ピアノ曲のみからなる傑作『ピアノのある家』（二〇二二）と、彼個人の内面の要求にしたがった、親密で独創的な作品をつくりつづけている。今回は、彼が独立後始めて発表したアルバム『自動結晶#1』を取りあげたい。

本作の収録曲は、前奏・間奏にあたる二曲を除く九曲すべてが、詩のテキストに音楽をつけたものだ。ランボー、ボードレール、ジュネ、アルトール、ケルアック、トム・ウェイツ、ガストン・ミロン、エメ・セゼール。ここでの音楽は、詩の言葉にメロディを当てるといふよりは、言葉のもつリズムと雰囲気音を音で表すもので、バビックスの声は、曲によって、朗誦と歌唱のあいだを揺れ動く。ちなみに、収録曲中、ウエ

イツの Watch Her Disappear だけは元から曲がついているが、この原曲自体、ウェイツの朗誦に伴奏をつけたもので、メロディはない。

元々、フランス歌謡界では、名詩が歌われてきた。レオ・フェレの歌声を通してボードレールやランボーに親しんだ者は多い。とはいえ、今日の歌手が、アルバム丸一枚をそれに費やすのはどうか。バビックスはこの企画を以前の所属会社のひとに見せたところ、時代遅れでばかっている、といった顔をされたという。けれどもバビックスにとつて、詩は幼いころから身近にあった、彼の「背骨」にあたるもの。だから、独立という転機にあたり、そこへ立ち戻ることに必要だった。

詩の言葉を、彼は自分の音楽に引き寄せない。それぞれの詩と詩人の個性に寄り添う。だから発声も音づくりも曲ごとに幅があるが、同時に、詩の選び方と、音を介した詩への寄り添い方に、バビックスの色が出る。性的夢想、叙情と哄笑、硬質さへの志向、内省、不在と死……。

このなかから、本作を締めくくる一篇で、アルバム全体のタイトルにも採用されている、エメ・セゼールの「自動結晶」を訳してみたい。一九四六年刊行の『奇跡の武器』所収で、改行も句読点も大文字もない、短い作品だ。原文では単語がずらずらと並ぶのみで、文の区切りは読者が判断するしかないのだが、日本語ではすべての文字をつなげるわけにはいかないので、大体の意味のかたまりごとに空白を入れた。以下が全訳となる。

もしもし またも一夜 問うにはおよばない  
わたしだ 洞穴男だ 蟬が鳴いて自らの生と  
死を麻痺させている 緑の水をした潟湖もある  
わたしは溺れ死のうとこんな色には決して  
ならない きみのことを思うために手元の  
単語はすべて信仰山<sup>モン・ド・ピエテ</sup>に預けた 水  
浴の女たちの櫓からなる河 流れる日は黄金

色で きみの胸のパンとアルコールのよう  
もしもし わたしは地球の明るい裏側にいら  
れたらと思う きみの胸の先端はその土地と  
同じ色と味 もしもし またも一夜 降る雨  
が墓堀人の指をしている 雨が屋根の上で足  
を皿に突っこんでいる 雨は中国人の箸を使  
って太陽を食べた もしもし 結晶の成長  
それはきみ…… それはきみ ああ風のなか  
にいない女 みみずに似た水浴の女 曙が到  
来するとき きみこそが島々の揺れる螺鈿の  
上に小川めいた両目を徐々に現し そしてわ  
たしの頭のなかでは きみこそが眩しいマゲ  
イ ベンガル菩提樹の下に碎ける鷲たちの波  
のよう

自動記述的な性質をもつ詩で、イメージが先  
行するので、慣用表現であつても直訳した箇所  
がある。「モン・ド・ピエテ」は公営質屋を指  
すが、字義通りには「信仰の山」を意味する。  
イタリア語の「モンテ・デイ・ピエタ」（慈悲  
の貸付）を誤訳したものが定着したらしい。

雨のくだりで「足を皿に突っこむ」とあるの  
は「乱暴な口を利く」を指す慣用語。雨が屋根  
の上で乱暴に話す、というのだから、屋根を叩  
く雨音の意と理解できるが、ここは前後に雨を  
擬人化する文が並び、「雨」の突飛な行動が読  
み手を刺激するところなので、あえてそのまま  
訳した。

終盤の「マゲイ」はリュウゼツラン科の多年  
草で、アガベともいい、甘い樹液がテキーラな  
どの蒸留酒の原料となる。バニヤンはイチジク  
属の常緑高木。全体にカリブ地域の風物がちり  
ばめられ、それらが女性のイメージと接続され  
ていく。電話での発話であることを示す「もし  
もし」や、「地球の明るい裏側」という箇所か  
らは、その女性（幻影のマルティニーク？）の  
遠さを感じられる。また、冒頭の「洞穴男」は  
通常「原始人」を意味するから、この名乗りに

は、ネグリチユードの詩人、植民地主義批判の  
論客セゼールの皮肉を読みとることもできるか  
もしれない。

バビックスは、「もしもし」(allo allo)の音  
声を銜のように重ね、抑揚を排したつぶやき声  
と単調な電子音（おそらくチェンバリン）を使  
うことによつて、夜中に電話越しに届く声の儂  
い感触を伝える。それは、電話機を通過した声  
に詩的言語を託すという、発表当時は自明だつ  
ただろうこの詩のモダンテイに、あらためて光  
を当てることでもある。

一方でフランス本土発のシユルレアリスムに  
多大な影響を受け、他方でマルティニークの空  
気につつまれて生きてきたからこそ、詩人は自  
分のなかに蓄えた言葉の連なりを、ほかでもな  
いこのかたちに結晶化させた。バビックスは、  
音に乗せることで、余計な飾りを加えるのでは  
なく、むしろ、ネグリチユードの……といった  
枕詞なしに、セゼールの詩に新しく出会う機会  
を、わたしに差し出してくれる。少し内気な、  
本読みの友だちのように。

Le cristal automatique

Aimé Césaire

Babx, *Le cristal automatique* #1, BisonBison / Lautre

distribution, 2014.

Aimé Césaire, *Les armes miraculeuses* (1946),

Gallimard, « Poésie », 1970.

<https://babxofficiel.com/>

<https://www.radiofrance.fr/franceculture/podcasts/af>

[faïres-culturelles/babx-est-l-invite-d-affaires-](https://www.radiofrance.fr/franceculture/podcasts/af)

[culturelles-8986837](https://www.radiofrance.fr/franceculture/podcasts/af)

## 交錯する「始まり」

唐十郎と寺山修司<sup>5</sup>

樋口良澄

1

唐十郎が明治大学の仲間とともに劇団「シチュエーションの会」を立ち上げ、最初の戯曲『24時53分「塔の下」行は竹早町の駄菓子屋の前で待っている』を上演したのは今からちょうど六十年前の一九六四年。そのチラシに寺山は「一読してアダモフやサミュエル・ベケットを思わせる前衛劇だが、きわめて日本的で（しかも浅草の重喜劇的で）その上、詩的でさえもある。私はこの上演を大変楽しみにしており、唐十郎らのグループが野外劇から市街での即興劇、オフステージ、ストリップなど、劇場を飛び出した前衛劇へ発展してゆくことを期待している。」と推薦文を書く。

寺山は唐と俳優として付き合い、すでに書いたようにテレビ・ドラマ『一匹』にも登場させた。そうした存在が戯曲を書いたことへの率直な驚きがこの文章から読み取れる。唐十郎二四歳、寺山修司二八歳。寺山はその五年前『血は立ったまま眠っている』を劇団四季に書き下ろしている。いや、短歌で華々しい活躍をし、ラジオ・ドラマやシナリオを書き、「家出のすすめ」を若者に説く、時の人だった。寺山は、ここで、前衛でありながら浅草・下町的な感性を持っていることや劇場におさまらない展開をする期待を書き、唐の本質を正確に見抜いていた。この後に「(勿論、唐十郎が単なるスキヤンダル・メーカーにとどまらぬことは作品を観るとハッキリわかることであるが)彼らがサルトルの状況劇を捨てて、創作劇に立ち向かったのは、ホップ・ステップ・ジャンプの「ホップ」として拍手を送りたい」と続け、唐の正統性をあえて指摘し、あだ花ではないと念を押す。

寺山が唐の行方をここまで見通していたことは、正直驚きである。劇場を飛び出す演劇を寺山も当時考えていたはずだ。寺山は唐に同志を見たのだろうか。寺山は、唐の発表に刺激を受け、ロートレアモンやアンドレ・ブルトンを唐に紹介し、いつしよに何かやろうと持ちかけたという(寺山・唐との対談「劇的空間を語る」一九七六)。唐の第三作『煉夢術』公演(一九六五)のパンフレットにも、寺山は文章を寄せている。ここでも「唐十郎の作品は、一口にいってきわめて感覚的であり、詩的であり、観念的であります。新川二郎の「東京の灯よいつまでも」のメロディでロートレアモンの形而上学をうたうといった奇怪千万な作劇術を身につけています」と、寺山の言葉で、唐の本質を正確に語っている。

一般には演劇と考えられなかったものに「演劇」を発見し、あるいは出現させることは、寺山と唐の最初期において共通した志向だったろう。寺山はその後、街頭の即興劇から大規模な市外劇を展開し、唐も紅テント興行へと、劇場を越えた活動を展開することになるのはいずれでもない。

しかし、これまで最初の戯曲と考えられてきた『24時53分「塔の下」行は……』以前に、小説『懶惰の燈籠』とシナリオ『幽閉者は口あけたまま眠っている』を唐は書いていた。判明したのは、二〇一八年(原稿は「文藝」二〇一八年冬号に掲載)で、唐が大学時代所属していた劇団・実験劇場の先輩でシナリオ作家の布勢博一が保存していたのである。私は唐の最初期を探るために、大学時代の演劇活動に焦点を当てた「実験劇場と唐十郎」展を明治大学で企画し、その準備のために布勢と会った。その時に原稿の話初めて聞いて驚愕した。布勢は「一九六一年の後半に、まだ学生だった大鶴君が当時住んでいた柏の家にあずかっていたので、原稿を二本持参し、『先輩、書いてみたので黙って読んでください』と言って僕にあずけた。習作と思いい、シナリオの方はすぐに映像化はしにくいと思ったが、大鶴君のだと思いい、大事に保管しておいた」と入手の経緯について語った。布勢博一は実験劇場の創設者の一人で、シナリオ作家として活動し『熱中時代』など、多くのヒット作品を遺している。新発見二作から読み取れる唐の作家としての出発は、いまだに十分論じられていないので、以下の記述は「文藝」掲載時の私の解説と重なるところもあるが、おさえておきたいので了承ください。

二作は一九六一年に書かれ、小説は「蘭妖仁」の筆名、シナリオは本名の「大鶴義英」名が記されている。唐は初期には、本名とともに複数の役名、筆名を使用していた。『23時53分「塔の下」行きは……』を書く前は役者であることしか考えていなかったと本人はしばしば語ってきたが、これらが書かれていたと知った時は驚きだった。

所属していた実験劇場は一九五四年に結成され、文学部演劇学専攻で教鞭をとっていた劇作家の木下順二、スタニフラスキーの翻訳者・紹介者として著名な山田肇らと密接な関係を持つて活動を開始した。彼が在籍していた一九五八年、六二年はまだスタニフラスキー・システム全盛の時代で、当時の学生たちはその方法論によって演劇的リアリズムを追究していたが、六〇年には日本全体を揺るがせた安保闘争があり、その影響を激しく受けた。この原稿も安保闘争とその挫折が密接に関わっている。

シナリオは学生運動と恋愛の挫折、小説は自然主義小説ふうの文体の日記形式で年上の女性への実らぬ恋愛が描かれており、後の唐には見られないリアリズム。この二作と後の「唐十郎」を接続するものは何なのだろうか。

彼の初期の戯曲は、静止した、死の世界を描いているものが多い。第一作『24時53分「塔の下」行は……』は、老人たちが町の塔から投身自殺する戯曲であり、第二作、三作も静止した時間を描いている。そうした志向の原点が新発見の二作品に生な形で出ていると私は考えている。

シナリオ『幽閉者……』では、主人公・野上壮二は安保闘争に加わり、敗北後、挫折から立ちなおれない。ともにデモに加わった辻紀子が、活動家にブルジョワとのしられた時、応答する言葉を持たず、彼女を失ってしまう。卒業し

会社もやめた現在、実家で母親とくらし、地下プールで泳いだり無為の日々をすごしている。紀子がゴルフアールになっていることを知り、追いかけて再会するが、互いに生きている場所の違いを確認するだけで、彼女を汚いプールという自分の世界に誘うことしかできない。他者に見える自分を生きることを決意した紀子には、過去を追う彼はケダモノにしか見えない。しかし紀子はその生き方をまっとうできず、ポイラー室に飛び込んでしまい、大火傷をおう。自滅する彼女を救うことも滅ぼすこともしないで、壮一はまたしても紀子を失う。彼はいわば静止した場所から、世界を見ている。その中でもがくが、世界は動き出さない。

『懶惰の燈籠』では、日記という形で自閉が告白体で描かれる。冒頭は、雨の描写で始まる。日記を読む語り手「僕」、「日記」の書き手「俺」の周りは雨。「しとしとと降りつづく雨の如く、俺の心の穴ぐらは暗く、誰も居ない。怪しいよと思っでもどうする術もない」。雨は内面の投影なのだろうか。「ポテポテポテポテポテ……」。本当に書きたかったのはこうした雨の音なのかと思いたくなるくらい、冒頭の平衡を破って長々と雨が描写される。

日記に繰り返し書かれるのは「虚しい」「無意味」という述懐。この虚しさから抜けだせる可能性を持つものとして年上の女性「藤巻さん」への恋が生まれるが、彼女が不治の結核にかかっているということがわかり、「俺」は再び「虚しさ」の方へ呼び戻される。「凡てが永遠に終わっている」「藤巻さん」「俺」はやはり立ち竦み、「生きてりやいいんだ」とつぶやく。

この雨は決して小さいものではなかった。二〇年後に書かれる『佐川君への手紙』（一九八二）の冒頭の「あなたはその木の下に蹲ったまま立ち上がれないでいる。耳を打つ通り雨の音を、濡れそぼつズボンの裾の冷たさを感じながらそこに居竦んでいる。」のという言葉につながっている。

作中の「私」が「佐川君」の殺人の際の心の動きを想像する記述である。雨の音として現れる、得体の知れない夢魔。それは「あなた」を魅了し、狂わせる。この雨は『懶惰の燈籠』の「俺」が見ていた雨と同じ夢魔だ。

「凡てが永遠に終わつた世界。新発見二作に登場する人物は、いずれもこの静止した空間に幽閉されている。あるいは、内部に静止した空間をかかえこみ、たえずそこに引き込まれ、動けなくなっている。おそらくは現実の一九六一年の唐十郎／大鶴義英が秘かにかかえていた閉域も、それだったのでないだろうか。外部との関係から描こうとしたのが『幽閉者……』であり、内部に遊行しようとしたのが『懶惰の燈籠』だったとも読める。この二作を止揚した場所に、これまで見ていなかかった唐十郎の「始まり」があるのだろうか。両者はひと続きの世界なのである。

しかし、初期の唐に「静止した世界」を動かす方法は、まだ見出せなかった。彼の周囲にあったリアリズム演劇や政治は、意志や意味を前提としていたから、彼のかかえる無意

識や幻想を表現する方法ではなかった。舞台という制約無しに、小説とシナリオという形式で、言葉だけによって静止した世界と向き合ったのに違いない。

### 3

唐が抱えていた静止した世界、つまり死の世界の根源を、私は彼の疎開体験に見ている。戦争末期の一九四四年、四歳の時に一家は生地の上野・下谷万年町から福島県富岡町に疎開している。翌年三月の東京大空襲により下町は焼け野原になり、敗戦後の八月に帰郷した少年は、変わり果てた町の姿に驚愕した。現実には廃墟と表裏であることを思い知ったのだ。戦後の復興も、彼にとっては虚構と感じられた。廃墟と死の世界に引き戻された。それが静止した世界の根源だ。

「私の夢遊病時代、それはあの陽光ゆらめく永遠の夏、戦直後の上野近辺のことなのだが、いつでもその眼前をたゆとうていた光景は生にあらさず、死であった。たとえば、熱れて異臭を放つ銀杏の森を歩きながら、追いつづけていたものは、滝をくぐって、墓場に向かう巨象の姿。それは、焼けたトタヤ屋根の横で、紙芝居の「少年王者」を見つめすぎたせいかもしれない。『わが青春放浪伝』一九七三)

『少年王者』は山川惣治原作のアフリカを舞台にした少年冒険小説。巨象も登場するその世界に紙芝居に焼け跡で魅入ったことが、敗戦後の唐少年の黄金時代だったのだろう。疎開から帰った上野・浅草は焼け野原になっていた。「象牙のそりかえる荒野」「青い沈黙の夜」とメタフィジックに書かれているが、廃墟／死の世界の光景から彼は逃れられなくなったのだ。

現実よりも強い幻想、あるいは現実が虚構であるという観念は、既成のリアリズムでは表現できない世界だった。唐の後の、新劇に代表されるリアリズム／近代劇を否定して紅テントによる演劇活動を持続した根源はここにあると私は考えている。敗戦と死の観念の視点から唐の作品群はもう一度読み直されなければならないだろう。

唐は抱えていた死の世界を自らあまり語ることは無かった。しかし、寺山にはわかっていたのではないか。彼の父は敗戦の年戦病死し、母は占領米軍との商売で孤獨な少年時代を送り、その中で言葉と向き合った。大学在学中にネフローズで死線をさまよひ、三年にわたり病床にあった。死の恐怖も誘惑も身に染みていたはずだ。病床からの最初の作品集のタイトルは「われに五月を」である。

唐の公演に寺山が寄せた二つの文章にある「詩的」という語を簡単に通り過ぎてはならない。俳句、短歌はもちろん詩についてもすでに活動を展開し、「現代詩」や「現代詩手帖」に関わっていた。最初の戯曲集『血は立ったまま眠っている』は詩書出版社思潮社から刊行されている。寺山にとって「詩的」とはヤワなロマンを表すものではなく、言葉によって言葉を超えたものに関わろうとする厳密な試みだったろう。寺山は唐の戯曲に言葉を超えた世界を見ていたのだ。

## 三浦不二子さんの花

新井高子

## 青空市場での出会い

不二子さんは、出会った者の胸に特別な輝きを残すひとだった。

出会いは二〇一六年六月のこと。啄木短歌の気仙弁沢会場ではなく、その催しを前日に終えたあと、懇意な中村祥子さんの案内で「赤崎復興市」を訪ねた。よく晴れた日、青空市場で魚の干物や手芸品などを物色していると、ギター演奏が始まった。中村さんといっしょに広場に並んだ椅子に座って聞きたはじめたが、しばらくするとなにやらお尻がもぞもぞする。振り向くと、真後ろに、にんまり笑う老婆があるではないか。その杖の先でつづいていたのだ。「見たことない尻だもの!」。そうしておしゃべりがはじまると、ユーモアと優しさにわたしはすぐさま魅了された。

お年を尋ねれば九二歳。最近まで牡蠣剥き殻から牡蠣をとる仕事をされていたというので、お若いですねと返せば、「膝は悪いけども、口の方がよっぽど悪い」と高笑い。わたしが横浜から来たこと知れば、「あんれまあ、そんな遠くがら」と、ご自身の手でわたしのそれを包むように土産物を握らせてくれる。恐縮しつつ、せめて礼状を出したいとお名前を尋ねると、ひと呼吸置いて「ヤマモト、フズコ!」。まともに書きとつてみると、周りのおんばたちが沸き立つように大笑いして、「このひとは、《大船渡の》山本富士子さんだよ」。往年のミス日本を引っぱって、まんまとわたしを嵌めていたのだ。フジコはフジコでも、ミウラフジコさんだった。

一瞬にして、まるで「お祭り」にその場を変えてしまう訝えと温かさ。映画制作にあたって、ご当地の「ミス日本」にぜひご出演をとわたしが願ったのは言うまでもないが、監督の鈴木余位さんととり組んだしごとが、ほんとうに「映画」になり得たのは彼女の存在が大きい。対話の面白さはもちろん、今野スミノさん、金野孝子さん、中村祥子さんとともに囲んだ終盤の宴で、机を太鼓代わりにして不二子さんが民謡を歌い出してくださらなかったから、あの場に花は咲かなかっただろう。その立ち去り際、鈴木さんの胸に名残惜しさが湧き上がらなかつたら、追いかけて撮った彼女の後ろ姿が、映画の末尾を飾ることもなかった。このドキュメンタリーに「ドラマ」を誰より授けてくださったのは、不二子さんだった。

## 採んで採んで

二〇一八年十一月の撮影から一か月くらいした年末、贈り

「アイオワ大学国際創作プログラム(二〇一九年)にわたしとともに参加したモロッコの詩人、ソーカイナ・ハビバラが、映画撮影後、

物をいただいた。箱を開ければ、塩鮭や筋子などの海産物で、嬉しい大好物ばかり。さらに、野趣あふれる塩蔵の海藻が大きなレジ袋いっぱいにあった。若布より硬そうだが、昆布ではなさそうで、海なし県生まれのわたしには、それがなにかわからなかった。

お礼とともに電話で尋ねると、「若布の茎だあ」。漁師の甥御さんがじぶんでとって塩漬にしたとのこと。食べ方を尋ねると、「採んで採んで採んで」。それからどうするんですかと聞くと、「んだがらあ(だから)、採んで採んで採んで」。口振りには海藻を手で採む触感がまさまき宿り、聞き惚れるくらいなのだが、さっぱり要領を得ないわたしの様子を察した娘さんが、受話器の隣から、塩気が強いからしばらく水に浸して採んで、細かく刻んだあとは、味噌汁の具でも和え物でも……、と教えてくださった。

言われた通りにして、まずは汁物に入れてみる。すると、圧倒的な美味しさに驚愕する。ひとかけらなのに、磯の香りと風味が、ぶんぶん、いや、もうもうと立ち上がり、勢いのある素晴らしい出汁がでる。ほんとうの海藻はここまで強いのかと感嘆しつつ、呪文のような「採んで採んで採んで」の声が耳に蘇った。そうして訪れた正月の雑煮も、この出汁で作ったが、毎日のように味わいつつ、やがてわたしは電車のなかでも路上でもその声を思い出し、小声で真似したりして楽しくなっていた。

そんな夕方のことだった。駅から家へ歩いているところで携帯電話が鳴った。中村さんからだった。さっそく出ると、躊躇いがちな声で、大船渡の新聞、東海新報に、不二子さんが一月十八日に逝去されたことが載っていると……。

撮影から二ヶ月後、電話でおしゃべりしてからほんの二週間余りのことだった。何としても映像をまとめる決意としてもそれは誓いたが、そういうときでさえ、どこまでも不二子さんらしさは続いた。若布の茎のスープは相変わらず胸が震えるほど美味しく、涙目で思い出してさえ、耳のなかでこだまする呪文の口振りには可笑しみがあつた。葬儀に参列した金野孝子さんによると、地域の観音さまの講に出かけた不二子さんは、いつも通りに集まったみんなを笑わせ、帰宅したところで体調が悪くなって入院し、それから一週間くらいで旅立ったのだという。九四歳だった。

## 「花」のひと

彼女を知るひとは、口を揃えて「特別なひと」だったという。いや、映画を見ただけでもそのスター性は伝わり、アイオワ大学で試写したときには、その後のつかのま、「Super Fujiko」ということばが、英語字幕の作成に協力した学生たちや創作プログラムの詩人たちに行き交ったほどだった<sup>1)</sup>。

不二子さんを絶賛したことについては、『現代詩手帖』二〇二四年四月号に拙文を記した。

一瞬にして周囲を惹きつける力を、「花があるひと」というならば、不二子さんは、まさしくそういうひとだったと思う。

対話の後半(今号には未収録)では、年輩になってから趣味で踊りや太鼓を習ったことが語られ、特に太鼓の名手で、気仙地域の祭りでは、各所から声が掛かったという。不二子さんの生来の「花」は「芸能」を呼び寄せ、その技は持ち前の花をさらに大きくしたに違いない。民俗芸能などにも興味があるわたしにとって、不二子さんという存在は、根源的な意味で「芸能者」とは何か」という大きな問いを、既成の枠にはまらず、しかも実像として投げ掛けてくれる気がする。

これも対話の終盤だが、「時に、津波をもたらす海をどう思いますか」というわたしの問いに対して、不二さんが返してくれた応答、また、当時一〇歳のスミノさんと交わした会話は、いまの社会の盲点だと思う。先日、哲学者、西谷修さんの講演会に出掛けたところ、モダニティ、すなわち近代とその発想を被っておらず、生まれ育った大地の栄養と知恵を深く吸収したひとを、侵略の歴史等に拘泥せずに広義の「先住民」と捉え直し、尊敬すべきではないかと語っていた。二人は、それに当たると言っているのではないだろうか。

ご存命なら、スミノさんは今年で一〇六歳、不二子さんはちょうど一〇〇歳。お元氣なそのほか三名のおんばも含め、彼女らからお話を聞くことができた幸福は、わたし自身がその大きさを深みをまだ十分に理解できていないと思う。

以下に、全体の四分の一ほどを掲載する。文字化に当たっては、映画字幕の作成の際に中村祥子さんが行った成果を踏まえた。註についても中村さん、金野孝子さん、そのご子息の良一さんからお力添えをいただいた。

### おんばに聞く

#### 生い立ち

新井 不二子さん、いまおいくつですか。

三浦 九四歳です。大正二三(一九二四)年四月三〇日生まれました。

新井 赤崎町のお生まれですか。

三浦 そうです。赤崎町で生まれて、部落が、この川(収録会場のそばにある、後ノ入川)の向こうだったの、家が。

新井 おうちは漁師さんですか。

三浦 へん?

新井 生まれたご実家のお仕事は、何でしたでしょうか?

三浦 父親は漁師。ウナギ(漁)専門だったの。

新井 そのとき、赤崎の海でウナギが獲れたんですね。

二西谷修講演会「今日の世界をどうとらえるか」(二〇二四年三月九日、於・横浜保木町びおシテイ)

三旧姓は、金野。

四 不二子さんは、その時、吉田家(孝子さんの旧姓は吉田)に住んで子守をし、そこから小学校にも通ったのではなかったかと孝子さん

三浦 そう。ウナギを獲って、盛都市部の町(の料亭)に出したの。

新井 ほう。

三浦 そして、子どもたち(自分達)は、その捌いだ骨っこ、ウナギの骨、それを醤油に浸けといて、そして焼いで、おやつに食べさせらいたの。

新井 だから、丈夫なんですね。

三浦 父親が獲ってきて、母親が捌くの。母親も上手で、スーッと裂いて、骨っこ、スーッと取って。その骨っこを、おらが食ったの。バリバリバリ。

新井 ご兄弟は何人でしたか。

三浦 兄弟六人。私一人、残りました。五人亡くなって。

新井 何番目ですか。

三浦 姉が三人、弟が二人。

新井 真ん中ですね。赤崎の小学校に通われたんですね。

三浦 うん、純赤崎。

新井 ほう、純粋な赤崎人。小さいとき、不二さんはどんな子どもだったんですか。

三浦 (自分を指さして)このとおり!

新井 このとおり(笑)!

三浦 このとおりで、(いまの自分は)子どもがようやくこのメンチヨ(外見の意味か)になったぐらいのもの。(頭を指さして)ここは、空っぽ。

新井 いやいやいや(笑)、この機転の利き方は只者じゃありません。

さつき(収録前に)、うかがったところでは、小学生のとき、金野孝子さんのご実家で、弟さんの子守をされたと……四。

三浦 うん。小学校のときだよな。六年生のときだったっぺかなあ。まあちゃん、おぶったの。おんぶしたんだよ。

### 製糸工場での恋

新井 どんな小学校時代だったでしょうか?

三浦 そんなとき、私が何年生だ……四年生だな。四年生のとき、友だちが——このへんだよ、うちがこのへんだ——授業終わって、授業以外(放課後)にソロバン、ソロバンやる友だちがいたの。で、私が(その友だちを)待っていたわけ。

新井 習い事が終わるまで、不二さんは仲良しさんを待っていた。

三浦 そしたら、私の本家が(珠算塾の)先生だったの。「なんだれ、おめが。人を待つてるよりは、ソロバンやれ! おめえもやれ! (何をしてるんだ、お前は。人を待つてる暇がある

は回想する。その母御、ウメさんは、不二子さんのことが可愛くて、「フズゴさん、フズゴさん」と呼び掛けていた声が耳に残っているそうだ。

五 孝子さんの弟御、吉田昌弘さん。

なら、お前も習え」って、ソロバン渡されたの。

新井 ほう。

三浦 それから、私も真剣になって、ソロバンやって。先に入ってた二人がやめてしまつて。(それでも私はやめねえで。やめると怒られつから、やり通して。)

小学校卒業したとき、「片倉製糸七」って製糸場が、高田(陸前高田市)にあったの。その人が(求人)に来て、私が採用されて。

そのあたり(その当時)、戦時中で、(糸は)落下傘の原料だから忙しかつたの。一〇〇人もの女工さんがいんだ。

新井 はい。

三浦 そこさ行つて、製糸のほうさ行つたんだども(まず製糸工として採用されたけれども)、これ(ソロバンの手真似をして)やるから、すぐ会社の会計さ入れられたの。

新井 なるほど。ソロバンができたから、糸取りじゃなく、経理係に変わつて。

三浦 会計のこと、やらせられたの。そして六年やつて、六年いで(勤めて)、戦争が激しくなつてきたし、そして、私の好きな人が、長野県人……。

新井 え？

三浦 偉い人が全部、所長さんなら、工場長さんなら……。

新井 片倉製糸だから、工場の幹部は、みんな長野県人なんです。

三浦 そう、長野県のあるが。こころであれば、高田、仙台、福島、千原つとごさ、(製糸工場)あつたんだ。

新井 そんなで、好きな人は……？

三浦 そんなで、そこで六年やつて、好きな人が……。あつ、言わねえ、おりや、これば笑。

新井 えーつ、教えてくださいよう！

三浦 ああ、やんたやんた(いやだいやだ)。

新井 (くすぐるように)好きな人が長野県人だつたの？

三浦 ふふふふ(笑)。好きな人が、長野県上伊那郡伊那富村の青年でした。この人も召集令状)が来て、(戦争)行つてしまつたの。

新井 行つてしまつたの？

三浦 行つた、その人……。 (話すのを)やめた。

新井 冥土のみやげに話してくださいよう。だつて、不二さんが忘れちゃつたら、その人のこと、たぶんもう、だれも覚えていないもの。

三浦 その人が(戦地)行くとき、「元気で帰つたら結婚し

ましよう」って言ったのが……。 (帰ってきたのは)箱が来たんです。

新井 箱が来たんですか。

三浦 うん。箱が来て。で、だめだと思つて……。 私は、そこから(製糸工場から)、帰つてきたの。六年間(だご)勤めた所を、辞めて、帰つてきたの。

新井 陸前高田から赤崎に戻つてきた。長野生まれの青年と恋したけれども。

三浦 うん。一目惚れだつたもん。

新井 そうして、結婚の約束まで交わしたけれども、戦争から帰つてきたのは……。

三浦 箱。

新井 そこにお骨が入つていたんですか。

三浦 箱つこだから諦めて……。

はい、第一巻の終わりでございます(笑)。

金野 (いっしょに聞いていた金野孝子さんが)美人さんだつたから、好かれたのよ。

新井 ねえ……。

### 召集令状の配達

三浦 そして、こつちさ来て(赤崎)に帰つて来て、役場さ入つて。

新井 赤崎の村役場に勤めたんです。

三浦 役場さ入つたところが、兵事課の方さ、入れられたの。まだ戦時中だからね。

そして、小学校の上(小学校の建物の上階にあたる部分のこと)か、もう兵隊がど(兵隊達が)、ぎっちりだの。

新井 そこが兵隊の詰所だつた。

三浦 今だらすぐ電話引くべども(今ならすぐに電話を引くの)だらうけど、電話ねえがら、役場さ電話が入るの(電話がないから、役場に電話が入るの)。その電話受けて、こんだはその(小学校の)二階まで行つて、それ(伝言のメモを)渡して。新井 役場に入った電話の内容を、詰所にいる兵隊さんのもとへ伝える係を不二さんはされて。

三浦 そうしたら、「まだ(また)電話来た」つて。ほれ、兵事課の方さ入れられたがら、電話(の内容と)いうのが、その召集令状。召集令状は、警察から来るし、地方事務所からは、役場の通知が来るの。

新井 たいへんに大事な連絡も入るんです。

三浦 ほいで、履きものがないから、下駄履いで行くんだ

六 中村祥子さんが、不二子さんの娘御、京子さんから聞いた話によると、珠算力は年をとつても健在だつたそうで、孫が高校生になるまで宿題は暗算で答え合わせをし、「〇番が間違つてるぞ」と教えていたそう。また、地元のスーパ「マイヤ」で、たとえカゴいっぱい買い物をしたとしても、レジに行く前に暗算で正確に合計金額がわかつていたという。不二子さんは芸能のみならず、算術の才にも長けていた。

七 片倉製糸紡績株式会社(現在の片倉工業のこと。明治以降の日本の製糸業を担った。長野から始まつたが、富岡製糸場もやがて合併。陸前高田市の工場は、地元との共同出資で、昭和五(一九三〇)年に設立された。八 気仙舟では方向を表す助詞として「く」「へ」でなく、「さ」が使われる。以下、同じ。



よ、下駄履いで自転車で(行くんだよ)。

新井 下駄で……。

三浦 そうしていったら(そんなふうにしていたら)、警察さ、召集令状とりき行つたれば、「履きもの、とり替えろ」って言うがら、「はあ、スリッパ九、どこにあるんだべ？」と思つて、たねだども(探したけれども)、スリッパなくて、わら草履<sup>一〇</sup>。警察でだよ。

新井 警察で……。

三浦 わら草履の履きものだったの。それ履いで、(召集令状を)もらつてきて。

さあ、今度は、赤崎町合足<sup>二</sup>までだもの(一山越えた合足まで配達に行くんだもの)。(役場のある)佐野から。

新井 不二子さんが召集令状の配達係でもあつたわけですね。

三浦 そう、(村中に)配達に行くの。暗くなるんだよ。

新井 それも辛い仕事ですね。

三浦 うん、そうだった。ほんで、召集令状の前にア、「足止め」って通知が来んのよ。遠方さ行つてる人に。

新井 よそに行つている人に、じぶんの家に帰つてきなさいという通知が来るわけですね。召集令状の前にね。

三浦 そして、それが来れば、召集令状、兵役の通知が来んの。

新井 そういうふうだったんですね。

三浦 うん。

私より一級上の小松ヨシミさんつう(という)人だったが、兵隊に海軍で行つたの。そしたら、海軍で休暇に寄越されたんだって(海軍の休暇で少しの間、帰つて来たそう)。家さ、母一人、子一人なの。(そして、また戦地へ)行つて、まもなく戦死の公報が入つたの。

新井 え……。

三浦 あんときのぐりや、辛えごどア、ながつたなあ(あのときぐりや、辛いことはなかつたなあ)。

新井 それを知らせに行くのも、不二子さんの……。

三浦 うん。持つていがねばわがねえもの(持つていかなければならなかつたの)。

新井 そういう役目なんですね。

三浦 「なんと、母さん、おら、とげーも(とても)、今日は、やんた役、言いつけらいで来やんしたが」、つたつきや(「なんと、(ヨシミ君の)お母さん、私は今日は、とてもいやな役を言いつけられて来ましたが」と言つたら、「あや、なんでござんせ」って)「まあ、どういふことでしょうか」と。

九ここのスリッパ は、「洒落た履きもの」という意味だろう。

一〇 下駄は、非公式、非正式だという意識があつた。わら草履のほがまだ公式だったのだろう。存命なら一一〇歳、大正二(一九一三)年生まれのわたしの祖母も、着るもの以上に履きものを気にした面があつて、他家を訪ねるときなどは、特にそうだった。  
二 「合足」は赤崎町の小字。読み方は「あつたり」。

わがつたつたんだべな、母さんがなあ(察したんだらうな、そのお母さんは)。

「こういうわけで」って、その戦死の公報、出したれば、その母さんが、「ほんとに、おらい(おらのいえ)のヨシミスか? おらいのヨシミは、この間、休暇で来て帰つたばり(ばかり)だが、おらいのヨシミスか?」って言うんだ。

「母さん、間違ひねえでば。ヨシミ君だでば」って。そして、それ(広報)、置いて来たごどもあるしさ……。

うん。いろいろだあ。(昔の流行歌を引いて)「私の人生辛かつた!」。んふふふふふ。

金野 んだねえ。戦争時代だからねえ。

### 津波の体験

新井 津波もいろいろ経験されていますよねえ。

三浦 昭和八(一九三三)年のとき、三陸大津波に遭つて流されて、そんなとき、私は小学校二年生。

新井 まだ七つ、八つくらいですね。

三浦 昭和八年の津波に流されて、こつちの部落さ(後の入川の対岸からこちら側へ、行政の政策で)寄越されて、そこで、チリ津波(一九六〇年)で流されて。それ二回目ね。チリ津波でも流されてしまつて。

こんだ、どこさ家建てるべど思つたつげア(今度は、どこに家を建てようかと思つたれば)、また、もどんどごさ建でさせらいたの(また、元の所、つまり、後の入川の対岸に、政策で建てさせられた)。それで、こんだは、ほら、この間のあれ東日本大震災で、また流されてしまつて。

新井 また流されてしまつたんですね。

三浦 そう。三回、流されたの。それで、その高台さ(収録会場付近の高台に)、うち建で、私の実家の人たちがそこにいる。

新井 ご実家が、三遍も……。

昭和三陸津波のときは、津波が夜、来たんですね?

三浦 夜。

新井 どういうふう逃げたんですね。

三浦 地震がよると(発生すると)、すぐ、われえ(我が家の父親は、みんな、起こして。寒がつたがら、霜降つてながら、着物着せで、足袋履がせで、首巻きさせで。そうしていだの(そういう身支度をしっかりさせていたの)。

(ほかの人たちは)みんな裸で、チンチンぶらぶらどして、(下着も着ないで)走つてだ人もあつたんだがら<sup>三</sup>。

新井 丸裸で逃げた人もあつたんですね。(後略)

三 この時代は、寝間着を着ず、裸で寝ていた場合も多かつたのではないだろうか。わたしの祖母は、冬場に孫たちが風邪をひかないよう、「ドテラ、よく着て寝ろ」としばしば注意した。わたしたちは、もちろんパジャマを使っていたが、「掛けて寝ろ」でなく、「着て寝ろ」と言つたのは、裸にドテラで寝る習慣があつた彼女の幼少期の言い回しの名残りだったのでないかと想像する。